



## 二渡 あかり (ふたわたり あかり) 明治大学附属中野

八王子中 1 年生

作品名: 西の魔女が死んだを読んで

図 書: 西の魔女が死んだ

西の魔女と聞くと、なんだかおそろしい様な印象を受けるが、この本の中で言う魔女は主人公まいの優しい愛情深い祖母であり、まいとまいの母が、こっそりと『西の魔女』と呼んでいる、ニックネームのようなものだ。

この物語は、自分の気持ちをうまくコントロールできなくなり、学校へ足が向かなくなった中学一年生のまいが、親元を離れ、おばあちゃんと二人で一カ月程、田舎の自然の中で暮らしをするうちに、自分の気持ちを整理する力を身につけ、成長していく話だ。私はこの物語で、心に残ったことが二つある。

まず一つ目は、まいが、おばあちゃんと一緒に魔女修業を始めることだ。魔女修業と聞くと、呪文を唱えたり、大きな鍋で薬をぐつぐつ煮込んだりすることを想像するが、まいの修業は全く違うものだった。早起きをすること、食事をしっかり摂ること、自分の仕事を持つこと、しっかり運動することなどあたりまえだと思うようなことばかりだった。そしておばあちゃんはまいに、これらのことを成し遂げるのにいちばん大切なのは、『意志の力、自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力』なのだと教えてくれた。私はこのおばあちゃんの言葉が心に響いた。なぜなら、私は自分で決めて動くことが得意ではない。自分ではよく分からないが、責任をとるのが怖いのかもかもしれない。それとも、指示される方が楽だからかもしれない。それに私は、計画をたてても、まあ、また明日でいいや、今日は疲れちゃったし、などと自分に言い訳をして最後までやり遂げられることはなかなか無い。こんなじゃだめだなと自分に思っている時に、このおばあちゃん言葉に出会った。一生この言葉は忘れられないと思う。

二つ目は、まいがおばあちゃんに、『死』について聞いたことである。まいは以前父に人は死んだら人はどうなるかを聞いた際、人は死んだら、もう最後の最後、自分というものが無くなるとあっけなく言われ、傷ついていた。でもおばあちゃんの

考えは違<sup>ちが</sup>った。まいが同じ質問を投げかけると、おばあちゃんの信じている死後のこととして、人には魂があり、人は身体と魂が合わさってできて、死んだら身体は無くなってしまいが、魂は長い旅を続けて生き続ける、と話してくれた。そしておばあちゃんはまいに、おばあちゃんが死んだら魂が体から離れたことをまいに知らせあげると約束してくれた。私は今までまいのお父さんと同じで、死んだらそれまでだと考えていたし、まいのようにそんなに深く考えたことも無かったので、おばあちゃんの考えに感動した。『死』に対する恐怖が少し無くなったような気がする。

私はこの本から、多くのことを学んだ。まいはおばあちゃんとの修業で自分の気持ちを整理できるようになり、学校にも行けるようになった。そして私も、この物語を読んで何かが変わった。何かを成し遂げるにはじっくりあきらめずに取り組むこと、自分で決める意志の力を育てることなどが大切、私もまいのおばあちゃんから自分の小さな悩みの答えをもらったような気がする。まいとの生活をおばあちゃんは魔女修業と呼んでいたが、本当の魔女修業とは、大人になるための訓練だったのかなと思う。

まいがおばあちゃんのを離れて二年後、まいの元におばあちゃんが亡くなったという知らせが届く。おばあちゃんに素直な気持ちを伝えられないまま別れてしまい、落ち込んでいたまいに、おばあちゃんは素敵なプレゼントを残してくれていた。あの時の約束の答えだ。おばあちゃんの家窓ガラスに、魂が身体から脱出したことを知らせるメッセージがあった。まいはおばあちゃんの愛を感じ、幸せな気分になった。最後の最後までおばあちゃんの愛に包まれた、お話だった。